**鹿沢温泉**

鹿沢温泉は、マグネシウムと炭酸水素ナトリウムを含む天然炭酸温泉である。群馬県の温泉のほとんどは、微量のミネラルしか含まない単純温泉か、硫酸塩泉、塩化物泉のいずれかである。源泉から 47.5 度の熱水が湧き出ており、地表に到達するまでに冷えるため、浴槽に注ぐ前に加温・冷却する必要がない。炭酸水は、血行を促進し末梢神経を刺激するため、肌に良いとされている。

鹿沢温泉は、昔から癒しの湯として知られてきた。温泉発見の神話の一つは 650 年前にさかのぼり、白い煙が立ち上っているのを不審に思った村人たちが山を登ったところ、彼らの前に薬師如来が現れ、地面から熱湯が湧き出した。 もう一つの伝説によると、「鹿沢」（「鹿の小川」の意）という名前は、温泉の湯で傷を癒した一匹の鹿に由来するという。

鎌倉幕府（1185 年～1333 年）の創始者である源頼朝（1147 年～1199 年）は、1193 年にこの地で狩りをしていた際に小屋を温泉に建てさせたが、文書で確認できる最初の浴場は 1562 年になってから初めて登場している。江戸時代（1603 年～1868 年）を通じて、鹿沢温泉は大変な人気を博し、旅館や日帰り入浴施設が建ち並ぶ賑やかな町となった。1918 年には 5 つの共同浴場が設けられ、年間約 5,000 人の利用者があった。

その年、災害が襲った。大火災により町は全焼し、唯一残ったのは紅葉館だけだった。紅葉館は現在まで残っているが、他の温泉施設はより広くて平坦な地域に再建された。新しい鹿沢温泉の最初の 3 軒の旅館は、翌年の 1919 年に開業した。

**百体観音の道**

鹿沢温泉は群馬県にあるが、歴史的に特に長野県境の街、東御市の住民に人気があった。東御市から旧鹿沢温泉までの 12 キロの道路沿いには、1 町（約 109 メートル）間隔で 100 体の観音像が等間隔に並んでいる。

観音はサンスクリット語で Avalokiteshvara とも呼ばれ、慈悲の菩薩として知られ、衆生を苦しみから救う役割を担っている。これらの像は観音の 6 つの化身を表しており、それぞれが仏教の 6 つの世界のうちの 1 つで衆生を救う役割を担っている。これらの像のほとんどは 1864 年から 1873 年の 10 年間にわたって作られた。それらの像は、石工の中山暉雲の作品とされているが、1869 年に彼が病に倒れた後は、娘が多くの像の完成を手伝ったと言われている。観音像は一般的に寺院への参道に並べられるが、温泉への道しるべとして設置されるのは珍しい。温泉への道を歩く人々の安全を祈願して、これらの像が置かれたのだ。特に注目すべきは、1 番目、先頭から 50 番目、80 番目、そして 100 番目の像である。これらの像は他の像よりも大きく、それぞれ如意輪観音、馬頭観音、聖観音、千手観音を表している。